

はないかと感を深くするとともに、ソ連のおえら方もこの優しいナチャアニックの爪のあかでも煎じて飲んだら、我が北方領土四島の返還復帰もいましスムーズに話が運ぶのではないかと思うのは私だけではなからうかと残念である。わずか四か月足らずのナチャアニックとのつき合いであったが、愚直なほどお人好しだったナチャアニックの面影は、あの暗い陰うつな捕囚生活の中にも幸い明るいエピソードの一つとして、いまだに脳裏に去来してやまない。

ラーゲル内での苦渋に満ちた思い出について、現在では個々の人々について私個人としては一片の怨念も残らない。お互いに苦しい経験を乗り越えて、さらに帰国の困難に耐えて今日の平和な生活を築いた戦友に心から感謝して、楽しく語り合うことを望んでいる。

三年四か月間の捕虜時代を振り返ってみて、多数の戦友たちの記憶をたどり、「私の三年四か月間は、果たして何だったのか、我々の心に何を残したのか」が胸中に去来して去りがたい思いがする。

昭和二十三年十一月末、舞鶴港に上陸してまず私の感

じたことは、「国敗れて山河あり」懐かしい故郷の温かみであったが、同時に三年四か月の薄暗い陰惨な重々しい捕虜生活からの解放感であった。家族との再会の期待とともに前途の生活についての不安感が工作した複雑な想いであった。当時は完全な虚脱状態のいわゆる捕虜げけ状態であったのであろう。

最後に、酷寒異郷の地に果てた数万人の戦友たち、開戦直後我々の楯として散華された特攻隊の方々、さらに犠牲となられた多数の民間人のみたまに心から哀悼の意を表します。

シベリアの記

岩手県 笹川 博

終戦を満州の興安嶺のオンドル部落で知ったのが昭和二十年八月二十九日、戦い済んで私は病氣となり、興安の野戦病院からチチハルの陸軍病院へ入院、病院での我々への悪口は興安のカラス部隊。一か月戦闘をし、敗

残兵の姿であったので悪口だと思う。

十一月四日、シベリア經由で日本へ帰すというので、正民屯駅から第十四作業大隊（このとき変だと思ふべきだ）の一員となり出発、汽車は西へ西へと走る。満州里を過ぎ、ブラゴエシチエンスクを過ぎるも西へ走る。何か変だと気づく。これで一卷の終わり、皆あきらめる。

十一月七日、チリノスカヤ駅着、十キロくらい歩いてカダラの収容所へ。建物は昔シベリアへの流刑者を収容した二階建ての建物。入ってみたら電気もなく、ランプもなく、便所もない。零下四十度での大便をするとき尻が凍るようだったし、尻をふく紙もなく、ないないづくしの収容所生活。食べ物はずूपと黒パン一個を七、八等分したもので、夜昼はおかゆ（雑穀）ニシン半分、若干の変わりあったが、抑留生活中量がだんだん多くなっただけ。抑留されて翌春まで生活環境の変化、飢え、寒さと不慣れな作業で一人二人と死亡、一日二十人くらい死亡した日もあったように思う。毎日が長く、一日が三日くらいに感じながらの生活だった。

五月の声を聞くと寒さもやわらぎ、収容所もカダラか

らチリノスカヤの第十分所へ移る。作業は土木、建築、道路、炭鉱作業に従事。私は昭和二十二年ころより炭坑内作業に従事。炭坑内での作業は杭木組み立て、石炭掘り、石炭車の搬出、石炭を貨車積みする作業、ロシア語でスタカンとかいっていた。鉄道の引込線の上の栈橋で石炭車をひっくり返して石炭を貨車積みする作業、この仕事が一番長く、十人くらい一組で炭鉱作業は三交替制であった。当初はノルマも達成できない作業状況だった。昭和二十二年ころよりノルマ達成ができるようになった。ノルマ達成すると、月十ルーブルくらいもらった記憶がある。

休日、ロシア人の軍医に引率されてバザールへ買い物に行ったこともあった。民主化運動は昭和二十二年ころより反軍闘争が始まり、学習がグループ活動で開始され、アクチーブ員が若干出、昭和二十三年春、私にも青年同盟へ加入せよと言われた。しかし何がなんだかわからず、もやもやしているとき、眼を患って入院し退院してきたら、若い人のくせに何もやらないというので、反動としてつるし上げられる状況と知り、青年同盟に加入

活動。

昭和二十三年七月ダモイ命令を受け喜ぶ。汽車でナホトカへ、帰還船なくあと戻り、ナホトカより六時間くらいのところのアルチョングレスにたどりつく。作業は火力発電所の石炭おろし作業であった。十月ころ伐採作業のため入山、人員は五十人であった。このときの体験は一生忘れることができない。それはみんなと一緒にいないと思ふ疎通を欠くということである。アルチョングレスへ来てからの民主化運動は激しく、小生もアクチーブとなり勉強させられた。第二伐採作業隊では私は糧秣係で、アルチョングレスの本所へ毎月糧秣受領に行っていた。道順は第一伐採作業隊まで馬そりで行き、それからトラック便乗であった。我々は第二伐採作業隊で、建物は丸太小屋ランプ、生活暖房には薪を使用、一晚二間くらい燃やして暖をとった。春が来て、伐採終わり、マイハ部落へ移り道路作業に従事。春の沿海州地区は山菜が多く、作業終え、帰る道脇からワラビ採りをして夜ワラビ汁として食べた。

五月中旬だったと思う。我々の監督のおばあさんが死

亡した。墓穴掘りに協力してくれと言われ、小生外五人ウラジオストックの墓地へ行く。墓穴掘りをやる。背ほど掘ったら先人の骨が出る。穴より出しておく、監督が来て、骨が出てはだめだ、横を掘ってくれという。我々は横を同じくらい掘る。また骨が出る。今度は横の穴に入れて土をかけておく。監督が来て、骨が出ないかと話すも、出ないと言ってやる。ハラショーと言って去る。しばらくしてソ連式の葬式が始まる。仏教とは異なっているが、葬式はいづこも悲しい式だ。葬式終わり、帰りもトラックに乗せるかと思った、勝手に帰れとのこと。ウラジオストック駅より汽車に乗る。ロシア人たちは口々にヤポンスキー・ジンギイエスと聞いている。我々はニエトと答える。発車、車掌が切符売りに来る。ロシア人たちがヤポンスキーと言って我々を隠してくれる。ロシア人は個々は善人の感じがする。無事駅に着く線路の反対側に降り宿舎へ帰る。帰ったらダモイ命令がきていた。

またまた汽車でナホトカへ。二か月くらい道路工事に従事。昭和二十四年八月九日、帰還船第一六拓丸へ二人

ずつ手をつなぎタラップを駆け上がる。陸から船へ、これで帰れると思ったときの感激、一生忘れることができない。さらばナホトカよ、小さな黒パン一枚で送った青春の五年間。

舞鶴入港時アンケート用紙配付さる。見るとソ連の軍事施設等記入せよとある。我々は再び戦争に巻き込まれたくないとアンケート記入を拒否。一週間上陸が延びた。

シベリア抑留記

熊本県 吉間 政範

教職につき三か月目の昭和二十年一月二十五日、赤紙（現役召集）が来ました。「一月三十日西部一六部隊に入隊せよ」とのことです。入隊直後、新品の軍装一式をいただきました。古年兵は「お前たちは満州行きだ」と言います。二月十一日夜半突如起こされ、「軍装を整えて出発準備」との命令で、渡鹿の一六部隊から熊本駅近くの

北岡神社に集結しました。熊本駅発夜行列車で博多着、輸送船で朝鮮（現在の韓国）の釜山に上陸、その後軍用列車で朝鮮半島の東岸を北上して、図們江の凍結した河を渡り満州に入りました。そして東満の中心地牡丹江の街を通過してソ満国境の兵舎に入りました。

三月十日、雪のちらつく寒い日、軍旗を迎え、満州歩兵第二七八連隊（満州八〇三部隊）が新しく編成され、スズランの花咲く満州の広野で激しい訓練が始まりました。

六月上旬、幹部候補生として中隊選抜で合格、喜びもつかの間、ソ満国境（八面通）の陣地構築に出発しました。

このころ、独ソ戦でドイツの敗退に伴い、ソ連軍に対応するため、陣地の立て直しを図っていた関東軍の虚を突き、昭和二十年八月九日午前零時を期して、ソ連軍は全満に対して急襲、侵攻を開始しました。

ソ連軍は、大型戦車数十台を先頭に随伴歩兵を従え、国境を越えて侵攻してきました。我が隊は陣地構築作業中で、交戦するための武器はほとんど持っておらず、敵